

もくじ

特集：青少年と文化活動

座談会 高校生の演劇活動 — 全国高等学校総合文化祭を通して —	沖田岑夫 4 内木文英 佐野由恵 田原昭之 (司会)
青少年文化としてのコミック 遊びの中の文化	石ノ森章太郎 11
世界の日本人となるためには	見城美枝子 13
第十三回全国高等学校総合文化祭 未来へ向けて燃える高校生——岡山大会	三枝成彰 15 17

我が県の文化行政——㊦

香り高い県民文化の創造をめざして 山梨県 19

特色ある文化活動——㊧

オーケストラ・アンサンブル金沢の設立
オーケストラ・アンサンブル金沢 22

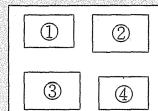
第5回国民文化祭・愛媛90
事業別実施計画決まる(2) 24

- 平成元年度税制改正について 25
- 平成元年度
こども芸術劇場公演について 26
- 平成元年度
青少年芸術劇場公演について 27
- 文化振興会議の開催について 29

- 文化庁行事報告
及び予定……………30
- 「美をもとめて」
放送予定……………30
- 国立劇場ニュース……………31

表紙写真紹介

第12回全国高等学校総合文化祭
(熊本開催)



- ①マーチングバンド・
バトントワリング部門
- ②バレード
- ③吹奏楽部門
- ④邦楽部門

題字デザイン◆桑山弥三郎

青少年文化としての コミック



漫画家 石ノ森章太郎

マンガ(漫画)は、その発祥の時点から「文化」であった。

それは、アルタミラをはじめとする各地の古代人が刻んだ「岩絵」や、エジプトなどの墓陵・遺跡の「壁画」を見ればわかる。あるいはわが国なら、正倉院の天井板に描かれた「落書」、あの鳥羽僧正作と伝えられる「絵巻物(鳥獣戯画)」を思い出してもらってもいい。

そう、それは既にマンガ(漫画)であった。メモ代りの「記録書」である。単なる「落書」である。と、おっしゃる向きも多いと思う。が、そもそもマンガ(漫画)とは、現実を描き手の感性・創造(想像)力や誇張を加えた「メモ」であり、「落書」だったのだ。もう一度思い出して頂きたい。天井板の、目鼻を誇張した人間の「落書」。エジプトの鳥の頭をした人物。「岩絵」の極度に単純化された線で動物群……。

現代のマンガ家たちが描いているマンガ(漫画)と、なんとそっくりな事か!

それらはいま、貴重な「文化遺産」として、国宝級の扱いを受けている。

マンガ(漫画)メディアを「文化」としてこぼわったイントロになったには、理由がある。現在でこそ「文化」の一部である、と若干認識されては来ているが、ある時期、しかもかなり長期に渡って、あんなモノ扱いをされていた事があつたから、だ。

マスコミが、知識人たちが、PTAが、こぞってマンガ(漫画)を、青少年に害を与える俗悪メディアとして、目の敵にした時代。戦後間もなくから極最近まで、の事である。それは漫画がマンガに移行する(移行せざるを得なかった)時期と一致するし、新しい表現法をひっつけて登場した手塚治虫の功績(あるいは航跡)とも無縁ではない。マンガを(漫画)と書いてきた理由も、またそこにある。

ザッとその辺の事由を述べてみる。

衝撃と共に過日逝去したマンガの神様・手塚治虫。彼の最大の遺産は、漫画に映画的手法を取り入れたストーリーマンガを開発した事である。とは良く言われる。が、それは印刷メディアの漫画に対して、であり、以前に漫画・映画(アニメーション)では、デイズニーやフライシャーなどによって、当然の如く使われていた技法である。それよりも、これはご本人もおっしゃっていた事であるが、漫画を悲劇も含めたドラマが描けるメディア、にした事が大きい。物語漫画が無かった訳ではないし、映画的手法もまた、前述の如く、新しい事ではない。だが確かに「悲劇」は無かった。悲劇をテーマに加えた事によって、漫画は小説や映画をも凌駕し得る、無限大の表現メディアになり得る可能性を孕み始めた。これは正に、コペルニクスの転回、新しい発見、と言えるだろう。

では、何故手塚以前、それに誰も気付かなかったのか? 簡単である。「漫画」という呼称に、意識を縛られていたからに他ならない。鳥羽僧正の「鳥獣戯画」以来、北斎の「漫画」、明治のボンチ絵・滑稽画に至るまで、漫画は「漫画」であった。つまり、面白くて滑稽な絵に過ぎなかったのだ。逆な言い方をすれば、面白くて滑稽でなければ「漫画」では無かった、のである。

そこに、悲劇とドラマが侵入して来た。当然、面白おかしくだけ描く訳にはいかない。

どうなるか、と言えは漫画の「漫画」たる意味を消す為の新しいネーミングの必要性である。で、取り敢えず、意味を不明にする為に「まんが」にし「マンガ」にした。それでもまだ問題がある、と主張する一派が現われて「劇画」になった。そして現在、尚、包括し切れないとして「コミック」になった。C O M I C、横文字ならどうにでも訳せるだろう。メダタシ、メダタシ。

が、果たして、本当にそうなのだろうか？

その問題は一応、後に置くとして、とにかく、コミック(マンガ)は、このようにして内容、表現法共に、途方もないパワーを手中にした。従来は子ども向けのメディア(と考えられていた)だったからタワーとされてきたテーマやジャンル(例えばセックスやヴァイオレンス)に、マーケット(マンガ雑誌)の増加につれ、送り手たちが目を向けたのは自然の理、と言えた。それ(タワー)もまた人生というドラマの一部ではないのか、という訳だ。初めて見る画面、はその質とは無関係にショックングであり、好奇の目が注ぐ。そして当然、良識(と思われている)から判

ずれば俗悪、という結論になるのである。

少年少女向雑誌(子ども文化の担い手)の、人畜無害なおヤツ的存在だった筈のマンガ(漫画)が、今や毒混じりの主食になった。「良識」の批判も何のその、その勢いは衰えるどころか、ガン細胞の如くに増殖する。子どもマンガ雑誌離れしない大学生、社会人が槍玉に挙

げられていた頃である。こうして、描きたい送り手、読みたい受け手のイライラが高じた末に、生まれてきたのが「成人向コミック」誌、だった訳であり、更にその結果として、本当の意味で、漫画(マンガ)が変質する事にもなったのである。

子どものおヤツだった漫画が、主食になってマンガになった。主食はやがて、子どもだけのモノではなくなつて、今や水や空気の如くにまで成長(?)した。

子どもの日記は絵(マンガ)日記となり、ラジオやテレビへのリクエスト葉書きは絵(マンガ)ハガキになった。

学習マンガは、学校授業の、教科書の副読本として採用され効果を上げた。教科書(取り敢えずは小学校低学年用だけでも)もマンガで、という声が出て検討される事になるのも、もうそう遠い日ではないだろう。

マンガで文学を語り、マンガで映画を語るようになり、マンガが小説化され、マンガが映画化されるようになった。

文学や小説ばかりではない。政治も経済も歴史も、そして文化そのものまで、マンガで表現出来ない事象は無くなった。

企業が入社試験でマンガを描かせ、案内用パンフレットをマンガにした。

国家的イベントのマスコット・キャラクターにマンガが使われ、その企画スタッフにイマジニア(イメージ・エンジニア)としてマ

ンガ家が登用される。

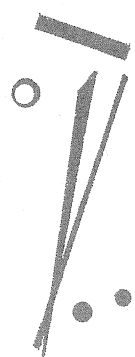
マンガ週刊誌が一誌のみで500万部も売れ、マンガ部門を持たない出版社の経営危機まで囁かれ始めた。

アイドル・タレントがマンガ「吹出し」用語を喋り、子ども同志、若者同志、あるいは子どもと大人、あるいは大人同志が、マンガを日常会話のネタにしても、違和感が無くなった。

たかがマンガ、されどマンガで、上限四十五歳くらいとして、現在、日本人の三分の二以上がマンガ人口という状況。子どもも若者も大人も、やがては老人も、なんらかの形でマンガの影響下に暮らす事になるだろう……。

いまは、コミックなるネーミングの問題も含めて、巨大な、そして正体不明のメディアに変貌してしまったマンガ(漫画)は、その行く末もまた不明である。

同時に、現在、あるいは未来に於て、文化としてどういう位置付けをされるのかも、当事者さえ(だからこそ)わからない、というのが正直なところである。そろそろみんなマジメに考えるべき時期、ではあるまいか。



【編 集 後 記】

遅れていた平成元年度予算がやっと成立し、五月二十九日、文化普及課に「地域文化振興室」が設置され、同日、文化庁内で「室」設置披露が行われました。

同室の設置目的等の概要については、次号で御紹介する予定ですが、全国の都道府県・市町村の文化振興活動への支援、協力をより一層強化することを目的としており、文化庁の地域への窓口となるものですので、これまで以上に地域の皆様と協力して、地域文化の振興に取り組み所存です。よろしくお願いたします。

特集は、若者の文化活動です。今日の若者は、演劇にミュージックにといろいろな文化活動に積極的に参加していますが、彼らが中高年齢になる二十一世紀には、国民の文化活動はどのようになっているのでしょうか。(K)

広告の問合せ・申込み先

株式会社ぎょうせい 営業第一課・宣伝係
〒100 東京都千代田区有明3丁目2番2号
☎(03)2691-4151(ダイヤルイン)

「文化庁月報」七月号

(通巻第二五〇号)

平成元年7月25日印刷・発行
編集 文化庁

〒100 東京都千代田区有明3丁目2番2号
発行所 株式会社ぎょうせい

本社 〒100 東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100 東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (03)2681-2441(代表)

振替口座 東京 91161番

印刷所 総行政学会印刷所

定価 一九〇円(本体一八四円)(送料四六円)
年間購読料 二、二八〇円(税込・送料共)